

や自分への問いとなっていき、その問いの答えを求めて心理学に期待をかける。

我が身を振り返って考えると、心理学を学ぼうと、この世界に入ってきた自分は、どうだったか。職業として専門的な学問を追究しようとしてきたわけであるが、心理学を学ぼうとしてこの世界に入ってきた、動機は、青年期にまつわる様々な悩みがあったと思う。青年期における、自分への問いや、人生への問いが、心理学に自分をむかわせていたのは、確かだといえる。学生時代には、心理学と平行して、平田オリザの紀行文に影響されて「自転車」に乗り、作家の丸山健二のエッセイに影響されて「バイク」に乗り、ジョージ・シーハンのランニング本に影響されて、「ジョギング」に凝り、つくづく影響されやすい傾向にあったが、自分自身の青年期のテーマのひとつは、「走る」だったように思う。その中で生活や自分への違和感をなんとか解消しようと試みていたように思う。

さて、始めに戻って、講義では、こんな自分のことは気分が乗らないと話さないが、自分はなぜこんなことをしたのか、という個人的な体験は、例えば、青年期を語る上でのバックボーンとなっていると思う。また、成人期、さらには中年期へとライフサイクルをたどっている自分・・・これもまた講義のバックボーンとなっていくだろうが、つくづく心理学とは、因果な学問であると思う。

\*\*\*\*\*

### \* \*\*\*\* 研究テーマと「私」との関係

水間玲子 (奈良女子大学文学部)

心理学の論文を最初を書くのはいつだろう。私は、大学生時代であった。おそらく多くの先生方もそうであったと思う。進路の問題も深刻さを増す3回生から4回生にかけての春休み、それまでのほほんとしてほとんど勉強していなかった大学生でも、否応なしに勉強しなければならない時期がやってくる。卒業論文作成である。そしてそれが、生まれて初めての論文作成となることが多い。

その中で、最初に求められるのがテーマ設定である。心理学における研究テーマを決める場合、その個人のあり方が反映されることが多いということはよく言われることである。たとえば、記憶研究者は記憶力が悪いというふうに。不登校やいじめ、発達障害など、個人がライフヒストリー的に抱えてきた問題に取り組んでいる場合もある。もちろん、偶然出会った面白い論文を始点と定め、そこから純粋に学問的興味で取り組む人もいるだろう。だが、そこにもやはり、個人の中にテーマとの接点というのが存在する。

では、青年心理学的なテーマを選択する者はどうだろう。卒論を書く者の多くは、一般に青年期後期といわれる時期を過ごしている。それ故、数ある青年期的トピックの中で研究テーマとして選ばれたトピックというのは、その時にリアルタイムで自分が抱えている問題とつながっていることが多いのではないだろうか。実際、「自己嫌悪感」をテーマに定めた私は、そうだったのである。

テーマに自分の問題が反映される場合、執筆者は、論じる対象である「青年としての自分」と、「執筆者としての自分」との二重性を強く体験する。自分自身の抱える問題は、直視しないことによって乗り越えられる側面もあるが、テーマとしておいてしまった場合、とことん向き合わねばならない。しかしながら、自分自身に関連する事象に対する認知のあり方は、他の事象に対する認知のあり方とは明らかに異なっており、独特の歪みが伴う。それが否定的な側面に関連する場合は、その事象に対する認知システムはさらに複雑になる。加えて、その問題が自分自身の核に根ざしたものである場合、その問題に向き合えば向き合うほど変な力動が自分の内

面で働き、問題意識をさらに肥大させてしまう。それはいつしか冷静な視点を凌駕する“魂の叫び”となってしまふ。

問題意識を模索する段階でも、調査に向かう段階でも、データを読み解く段階でも、考察を進める段階でも、とにかく、あらゆる思考のプロセスの中で、自分の内面からの魂の叫びと、冷静に客観的に論じるべき責務との闘いが繰り広げられる。初めての論文であるのに、これはかなりハードルの高いサブミッションである。なぜそんなテーマを選んだのか、後悔してテーマを変えようと思っても、どうしてもその周辺領域にとどまってしまう。

テーマとのこのような確執は、それを論じる者が乗り越えていくべき問題であると思う。当たり前のことだが、論文は作文ではない。自分のあり方も相対的に位置づけ、全体的な布置をとらえることが必要になる。自らのもつ価値観やこだわりから100%解放されて論文が書けるかということそれは一概には言えない。特に、人間性や生き方に深く関わるテーマであれば、考察の際に、問題展開の際に、その人の価値観やこだわりが見え隠れすることは少なくない。むしろ、それがあからさまな新たな論が生まれることもある。しかしながら、それが自身の“魂の叫び”に支えられたものであれば、危険である。それは、自らの問題に深く関わっており、それが意識を占めると、柔軟な視点を欠くことにつながるからである。無理が通れば道理がひっこむのである。

それでもやはり、心理学のテーマというのは、その人に根ざしたものである方が、魅力的であると思う。論文を読むとき、発表を聞いたとき、研究の背景にあるその人の問題意識が垣間見えたとき、その人の研究の意味が寸時に理解できることがある。もちろん、そこには、その人個人の世界における魅力を超えた学問的意義が伴わねばならないことは言うまでもない。だが、そこに+αの面白さが伴うか否かは、その人がどれだけそのテーマにコミットしているかによるのではないだろうか。そのコミットの仕方に、上手い・下手や、人それぞれのスタンスがあるのだと思う。

最近、ようやく自分のテーマに対しても冷静に向き合うことができるようになってきている。ある意味、人間的に冷めたのかもしれないし、私の青年期が終わったということなのかもしれない。卒業論文で書いたような内容はもう書けないな、としんみり思う時、二つの気持ちが生じる。研究者としての私は、あんな恥ずかしい論文、よく書いたなあと自分に呆れる。だが、一個人としての私は、その時にしか書けない論文を書いたなど、戻らぬ自分のあり方を、赤面しつつも愛おしく思うのである。

\*\*\*\*\*

## 社会人としてのスタートライン

藤井恭子（愛知教育大学）

2003年早春、愛知教育大学学校教育講座に採用していただき、着任した。筑波大学で大学院に進んだ22歳の春から数えて8年目になる。青年心理学の研究者を志して歩んだこれまでの院生時代を振り返り、陰に日向に御指導や御鞭撻、応援をくださった方々への謝意を表したいと思う。また、現在院生の方々には、不肖学生が大学院を巣立つまでの一つの事例としてみていただければと思う。

<研究者になることを志したとき>

高度職業人養成を目的とする筑波大学教育研究科で一本目の修士論文を書き終える頃、私はまだ自分の行き先(生き方)が見えずにいた。そんな混沌とした状況の中で、指導教官であった落合良行先生に、研究者養成を目的とする心理学研究科への道を照らしていただいた。先生か